2026年度 医学部 IR 報告書

―2025年度卒業生の初期研修先アンケート

現状と3年間の傾向―

藤田医科大学ＩＲ推進センター

医学部ＩＲ分室

2026 年 9 月 30 日



藤田医科大学ＩＲ推進センター　医学部ＩＲ分室

2026年度 医学部 IR 報告書

―2025 年度 卒業生の初期研修先アンケート

現状と３年間の傾向―

目次

概要

1. 背景と目的

2. 対象

3. 方法

4. 結果　　（1）2025 年度卒業生研修先の調査結果

（2）2023～2025 年度卒業生研修先の調査結果の推移

5. まとめ

資料　（依頼状、調査票）

2026 年度 藤田医科大学ＩＲ推進センター 医学部ＩＲ分室

一瀬千穂、高村真広、金子祥子、杉浦舞、中西紗也加、飯塚成志、

古澤彰浩、浦久保秀俊、国田勝行、藤江里衣子、吉本潤一郎

概　要

「独創的な学究精神を持った謙虚で誠実な医師を育成する。」ことが藤田医科大学医学部の使命であり、卒業時にすべての本学卒業生が身に付ける能力として「卒業コンピテンス（＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学及び関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞）」と、これに対応する「卒業コンピテンシー」を定めている。

本学が取り組んできたカリキュラム改革の効果を評価するため、2025年度の本学医学部卒業生を卒業1年目の研修医として受け入れた病院の直接的指導者に、研修1日目の「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する諸項目の修得度を評価していただいた。また、2025年度卒業生に対する評価結果に加え、2024年度・2023年度卒業生を対象とした過去2年度の評価結果と合わせて、直近3年間の推移を調べた。

2025年度卒業生で2026年度の初期研修先が判明している106人のうち、90人について回答が得られた（回収率84.9%）。7項目について「最低水準には届いている」と評価された割合は98.9〜100%であり、すべての項目で高い水準にあった。また、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は、＜コミュニケーション能力＞が74.4%と最も高く、次いで＜医師としてのプロフェッショナリズム＞が67.8%であった。一方、＜地域社会への貢献＞は48.9%と最も低く、＜独創的探究心＞も52.2%と比較的低い評価であった。

直近3年間の推移では、「最低水準には届いている」と評価された割合は、すべての項目において一貫して95%以上と高い水準を維持していた。一方、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は、2023年度から2024年度にかけてすべての項目で低下したものの、2024年度から2025年度にかけてはすべての項目で上昇した。特に、＜地域社会への貢献＞、＜独創的探究心＞、＜専門職連携＞、＜医学および関連領域の知識＞では10ポイントを超える上昇がみられた。ただし、2023年度と2025年度を比較すると、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は、7項目すべてで2025年度の方が低かった。

1. 背景と目的

本学医学部は 2015 年度第 1～3 学年よりアウトカム（学習成果）基盤型教育を取り入れた新カリキュラムに移行している。「独創的な学究精神を持った謙虚で誠実な医師を育成する。」ことが藤田医科大学医学部の使命であり、卒業時にすべての本学卒業生が身に着ける能力として「卒業コンピテンス（＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学及び関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞、＜地域社会への貢献＞）」と、これに対応する「卒業コンピテンシー」を定めている。

本学が取り組んできたカリキュラム改革の効果を評価するため、本調査では、2025 年度の本学医学部卒業生を卒業 1 年目の研修医として受け入れて頂いた病院の直接的指導者に、研修 1 日目の「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する諸項目について、その修得度を評価していただいた。第三者の視点から評価とフィードバックを受け、今後の医学部教育の見直しの資料とする。2025 年度卒業生に対する評価内容を分析するとともに、2024 年度・2023 年度卒業生を対象とした直近の過去 2 年度の評価結果と合わせて、過去 3 年度にわたる変化を調べた。

2. 対象

2025 年度の藤田医科大学医学部卒業生で、2026 年度の初期研修先が判明している研修医 106 人が対象である。なお、2024 年度と 2023 年度の調査対象者はそれぞれ 101 人と 115 人であった。

3. 方法

2025 年度の本学医学部卒業生を 1 年目の初期研修医として受け入れていただいた病院の臨床研修センター長宛に依頼文と研修医の人数分の質問票を郵送し、研修医の直接的な指導をされた方に、回答と返送を依頼した。研修医が複数名いる病院には、それぞれの研修医に対する評価を依頼した。調査実施期間は 2026 年 6 月から 7 月までであった。

臨床研修センター長宛の依頼文および調査票を巻末に示す。アンケートには病院名を記入していただいたが、集計・分析は匿名化して行った。調査票は 7 つの設問からなり、それぞれ、調査対象の研修医が、研修医 1 年目の初日の能力・資質として、4 段階の評価尺度（1：最低水準には届かない、2：最低水準には届いている、3：最低水準を超え、概ね習得できている、4：最低水準を超え、完全に習得できている。）のどの段階であったかの評価を依頼した。設問は次の通りである。

医師としてのプロフェッショナリズム	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている。
コミュニケーション能力	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている。
専門職連携	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている。
医学および関連領域の知識	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている。
独創的探究心	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が身についている。
診療の実践	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている。
地域社会への貢献	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている。

また、最後に自由記載欄を設定し、「何でも結構ですのでコメントを御願いします」と依頼した。

本学では、2024・2023 年度卒業生を対象に同様の調査を実施した（それぞれ、2025 年 6 月から 7 月までと 2024 年 7 月から 8 月までを調査期間として実施）。2024・2023 年度卒業生対象の調査方法は、今回と全く同じ内容であった。なお、「最低水準には届いている」とは、実施した 4 段階の評価尺度では「2：最低水準には届いている」以上の評価が得られたことと定義した。同様に、「概ね、または、完全に習得できている」とは、実施した 4 段階の評価尺度で「3：最低水準を超え、概ね習得できている」以上の評価が得られたことと定義した。

4. 結果

(1) 2025 年度卒業生研修先の調査結果

調査対象 106 人のうち 90 人について回答が得られた（回収率 84.9%）。

表 1 に 2025 年度卒業生の各調査項目における回答の分布を示す。「2：最低水準には届いている」以上と評価された卒業生の割合は、＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜コミュニケーション能力＞、＜専門職連携＞、＜医学および関連領域の知識＞、＜独創的探究心＞、＜診療の実践＞の 6 項目では 100%であり、＜地域社会への貢献＞についても 98.9%と高い割合であった。

「3：最低水準を超え、概ね習得できている」以上と評価された卒業生の割合を項目別に比較すると、＜コミュニケーション能力＞が最も高く 74.4%であり、次いで＜医師としてのプロフェッショナリズム＞が 67.8%、＜専門職連携＞が 61.1%、＜医学および関連領域の知識＞が 60.0%、＜診療の実践＞が

58.9%、＜独創的探究心＞が 52.2%であった。＜地域社会への貢献＞は 48.9%と 7 項目の中で最も低かった。

自由記載欄には 5 件の回答が寄せられた。卒業生が意欲的に臨床に取り組み、周囲の研修医・上級医・医療従事者とも良好な関係を築いていることを評価するものや、学生時代からの積極的な取り組みを踏まえて今後のさらなる成長を期待するコメントが寄せられた。一方、調査時点では研修開始から約 2 か月しか経過しておらず、ローテーションした診療科も限られていることなどから、個々の研修医の能力・資質を十分に評価することが困難であるとの指摘が 3 件あった。

（2）2023～2025 年度卒業生研修先の調査結果の推移

過去に実施した 2024 年度・2023 年度卒業生を対象とした調査では、調査対象者（それぞれ 101 人・115 人）のうち、それぞれ 58 人（回収率 57.4%）・89 人（回収率 77.4%）について回答が得られた。

表 2･3 に、それぞれ 2024 年度･2023 年度卒業生を対象とした各調査項目における回答の分布を示す。また、図 1 に「最低水準には届いている」と評価された割合の直近 3 年間の推移を、図 2 に「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合の直近 3 年間の推移を示す。

「最低水準には届いている」と評価された割合は、すべての項目において、2023 年度から 2025 年度まで一貫して 95%以上と高い水準で推移した。

一方、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は、2023 年度から 2024 年度にかけてすべての項目で低下したものの、2024 年度から 2025 年度にかけてはすべての項目で上昇した。上昇幅が最も大きかったのは＜地域社会への貢献＞で 16.1 ポイント、次いで＜独創的探究心＞で 16.0 ポイント、＜専門職連携＞で 14.5 ポイント、＜医学および関連領域の知識＞で 13.4 ポイント、＜医師としてのプロフェッショナリズム＞で 10.9 ポイント、＜診療の実践＞で 3.7 ポイント、＜コミュニケーション能力＞で 2.0 ポイントであった。

ただし、2023 年度と 2025 年度を比較すると、「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合は、7 項目すべてで 2025 年度の方が低かった。特に、＜医学および関連領域の知識＞では 9.7 ポイント、＜コミュニケーション能力＞では 7.6 ポイント、＜医師としてのプロフェッショナリズム＞では 6.4 ポイント、＜診療の実践＞では 6.3 ポイント低下しており、減少が比較的大きかった。

5. まとめ

本調査結果から、本学医学部卒業生の卒業コンピテンス・コンピテンシーについて、研修開始時点において「最低水準には届いている」と研修先病院の指導医から評価された割合は、すべての項目で高い水準にあることが確認された。また、直近 3 年間の推移をみても、すべての項目で一貫して 95%以上を維持していた。これらの結果から、本学が卒業時の到達目標として定める基本的な能力・資質については、ほとんどの卒業生が一定の水準に到達していると研修先から評価されており、本学の卒前教育の成果が安定して認められていると考えられる。

一方、より高い習得度を示す「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合については、年度による変動が認められた。2023 年度から 2024 年度にかけてはすべての項目で低下したが、2024 年度から 2025 年度にかけてはすべての項目で上昇し、一定の回復が認められた。特に、＜地域社会への貢献＞、＜独創的探究心＞、＜専門職連携＞、＜医学および関連領域の知識＞では 10 ポイントを超える上昇がみられた。しかし、2023 年度と 2025 年度を比較すると、7 項目すべてで 2025 年度の方が低く、特に＜医学および関連領域の知識＞、＜コミュニケーション能力＞、＜医師としてのプロフェッショナリズム＞、＜診療の実践＞で比較的大きな低下がみられた。このことから、2025 年度には前年度からの回復が認められるものの、より高い水準での能力・資質の修得という観点では、引き続きその推移を注視する必要がある。

ただし、これらの年度間の差を、直ちに卒業生の能力や本学の教育成果の変化と解釈することには慎重である必要がある。本調査は研修先の指導医による評価であり、評価者や研修環境が年度ごとに異なるほか、回収率にも年度間で差がある。さらに、今回の自由記載では、調査時点では研修開始から十分な期間が経過しておらず、ローテーションした診療科も限られているため、研修医の能力・資質を十分に評価することが困難であるとの指摘が複数寄せられた。したがって、調査時期や評価者が卒業生と接した期間などが評価結果に影響している可能性についても考慮する必要がある。

今後も本調査を継続し、単年度の数値だけではなく複数年度にわたる推移を確認するとともに、卒業試験、共用試験 CBT、OSCE などの客観的な学修成果指標を含む他の教学 IR データと組み合わせて多面的に分析し、卒業コンピテンス・コンピテンシーの達成状況を継続的に検証することが重要である。特に、今回「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合が最も低かった＜地域社会への貢献＞については、地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決に貢献する能力を育成するための学修機会がカリキュラムの中で十分に確保されているか、その学修成果が卒業時にどの程度身についているかを、関連する教育活動や他の評価指標も含めて検証する必要がある。その上で、必要に応じて地域医療に関する教育内容や実践的な学修機会の充実を検討し、教育改善につなげていくことが望まれる。

6. 謝辞

ご多忙のところ本調査にご協力いただきました病院ならびに指導医の皆様、調査依頼や調査結果の回収作業にご尽力いただいた医学部学務課・近藤宏美様をはじめ、関係各位の皆様に御礼申し上げます。

表１．各設問の回答分布：2025 年度卒業生への評価

	最低水準には届かない	最低水準には届いている	最低水準を超え、概ね習得できている	最低水準を超え、完全に習得できている
＜医師としてのプロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている			
	0 (0.0%)	29 (32.2%)	40 (44.4%)	21 (23.3%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、 相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている			
	0 (0.0%)	23 (25.6%)	37 (41.1%)	30 (33.3%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている			
	0 (0.0%)	35 (38.9%)	38 (42.2%)	17 (18.9%)
＜医学および関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている			
	0 (0.0%)	36 (40.0%)	39 (43.3%)	15 (16.7%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が身についている			
	0 (0.0%)	43 (47.8%)	32 (35.6%)	15 (16.7%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている			
	0 (0.0%)	37 (41.1%)	33 (36.7%)	20 (22.2%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている			
	1 (1.1%)	45 (50.0%)	28 (31.1%)	16 (17.8%)

（ ）：未回答者を除く％

表２．各設問の回答分布：2024 年度卒業生への評価

	最低水準には届かない	最低水準には届いている	最低水準を超え、概ね習得できている	最低水準を超え、完全に習得できている
＜医師としてのプロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている			
	0 (0.0%)	25 (43.1%)	28 (48.3%)	5 (8.6%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている			
	0 (0.0%)	16 (27.6%)	32 (55.2%)	10 (17.2%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている			
	0 (0.0%)	31 (53.4%)	24 (41.4%)	3 (5.2%)
＜医学および関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている			
	0 (0.0%)	31 (53.4%)	23 (39.7%)	4 (6.9%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が身についている			
	2 (3.4%)	35 (60.3%)	17 (29.3%)	4 (6.9%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている			
	1 (1.7%)	25 (43.1%)	27 (46.6%)	5 (8.6%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている			
	0 (0.0%)	39 (67.2%)	16 (27.6%)	3 (5.2%)

（ ）：未回答者を除く％

表 3. 各設問の回答分布：2023 年度卒業生への評価

	最低水準には届かない	最低水準には届いている	最低水準を超え、概ね習得できている	最低水準を超え、完全に習得できている
＜医師としてのプロフェッショナリズム＞	医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている			
	1 (1.1%)	22 (24.7%)	49 (55.1%)	17 (19.1%)
＜コミュニケーション能力＞	お互いの立場を尊重し、 相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている			
	1 (1.1%)	15 (16.9%)	47 (52.8%)	26 (29.2%)
＜専門職連携＞	患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている			
	1 (1.1%)	31 (34.8%)	51 (57.3%)	6 (6.7%)
＜医学および関連領域の知識＞	医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている			
	0 (0.0%)	27 (30.3%)	54 (60.7%)	8 (9.0%)
＜独創的探究心＞	疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が身についている			
	1 (1.1%)	39 (43.8%)	41 (46.1%)	8 (9.0%)
＜診療の実践＞	安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている			
	1 (1.1%)	30 (33.7%)	47 (52.8%)	11 (12.4%)
＜地域社会への貢献＞	地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている			
	2 (2.2%)	39 (43.8%)	39 (43.8%)	9 (10.1%)

（ ）：未回答者を除く％

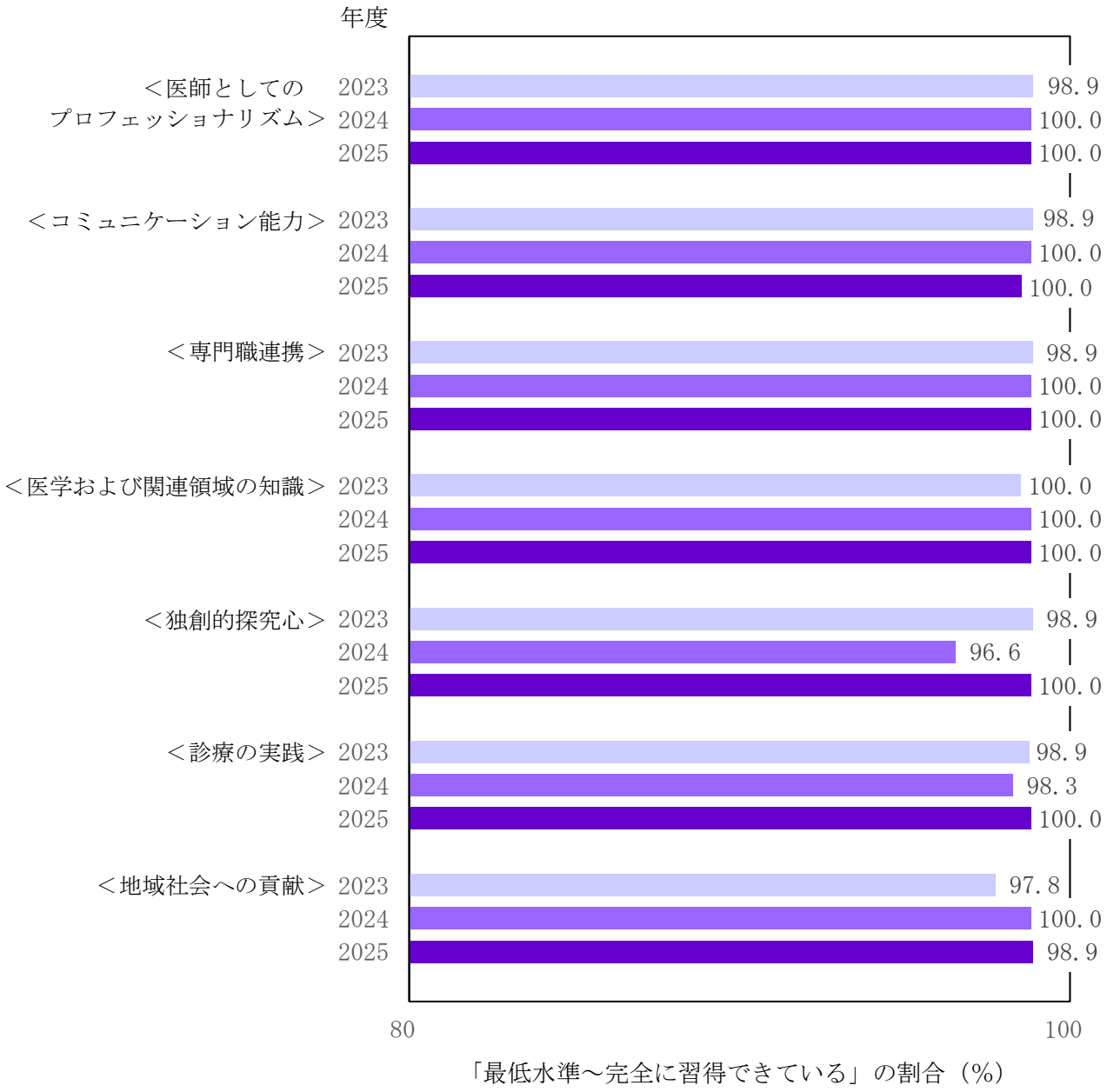


図 1. 「最低水準には届いている」と評価された割合：2023～2025 年度卒業生への評価

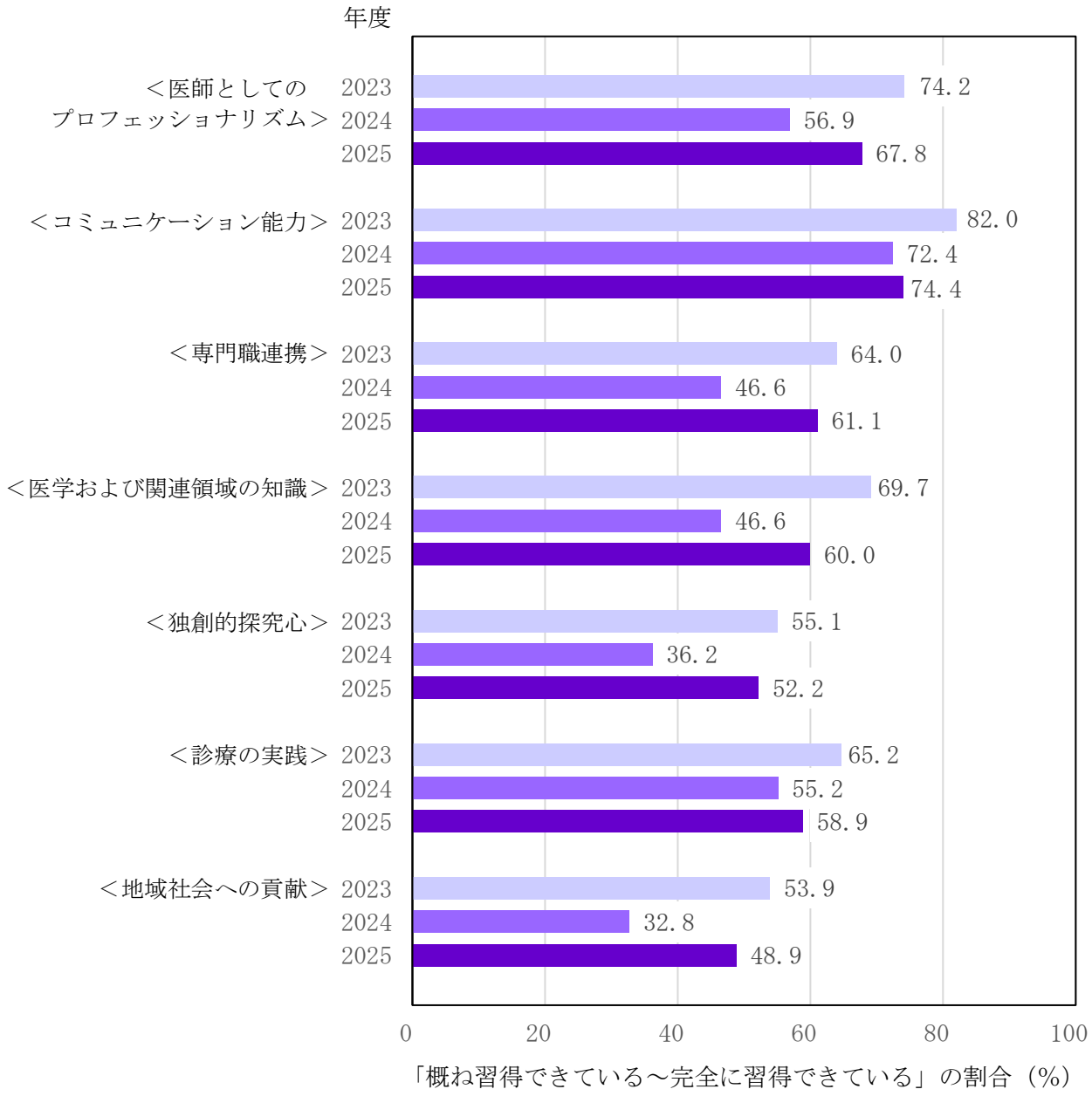


図 2. 「概ね、または、完全に習得できている」と評価された割合：2023～2025 年度卒業生への評価

資料 1. 依頼状（A4、1 ページ）

初期臨床研修 指導医　各位

この調査票は、藤田医科大学 医学部が定める「卒業コンピテンス・コンピテンシー」に関する第三者評価です。コンピテンス・コンピテンシーとは資質・能力のことです。現在の医学教育は学修成果基盤型（アウトカムベース）となっており、卒業時に身につける能力・資質を最初に規定し、これが学修されたときに卒業を認めております。本学の卒業生が、その能力・資質をどの程度身につけているか、勤務先の上長の皆様に第３者の視点から評価をしていただくものです。

本調査結果は、個人が特定されない形で集計・解析し、今後の本学の教育活動の発展にのみ活用致します。各設問について、どの程度身についているか、以下の６段階の尺度を用いて、マークしていただけますようお願い致します。

【評価尺度：４段階】
１：最低水準には届かない
２：最低水準には届いている
３：最低水準を超え、概ね習得できている
４：最低水準を超え、完全に習得できている

① できていない
④ できている

また、「1. 最低水準に届かない」を選択された場合の理由や要望等を、自由記載欄に具体的に記載いただけますと幸いです。
本学出身の研修医 1 年目が複数名在籍する場合は、人数分の評価を御願い申し上げます。

藤田医科大学　医学部
学部長　岩田　仲生
臨床教育統合活性化委員会
委員長　石原　　慎

資料 2. 調査票（A4、1 ページ）

【医学部　コンピテンス・コンピテンシー】

研修医 1 年目の研修を開始する際に必要な能力・資質として御判定下さい。

No	評価項目	評価	●
1	＜医師としてのプロフェッショナリズム＞ 医師としての責任感と職業倫理観に基づいて行動し、生涯にわたり向上心を持ち自己研鑽に励む自覚と能力が身についている	① ② ③ ④	
2	＜コミュニケーション能力＞ お互いの立場を尊重し、相手から信頼される関係を築くためのコミュニケーション能力が身についている	① ② ③ ④	
3	＜専門職連携＞ 患者の健康問題の解決に向け、多職種での取り組みを実践する能力が身についている	① ② ③ ④	
4	＜医学および関連領域の知識＞ 医療の基盤となっている基礎、臨床、社会医学等の知識を有し、応用する能力が身についている	① ② ③ ④	
5	＜独創的探究心＞ 疑問点を解決するために行動する独創的な学究精神と科学的能力が身についている	① ② ③ ④	
6	＜診療の実践＞ 安全かつ科学的根拠に基づいた適切な診療を実践する能力が身についている	① ② ③ ④	
7	＜地域社会への貢献＞ 地域の保健・医療・福祉の課題を理解し、その解決のために貢献する能力が身についている	① ② ③ ④	
●			●

自由記載

※「1.最低水準に届かない」を選択された場合の理由や要望等を 具体的に記載ください。その他ご意見がございましたら記載願います。

施設名：